

研究

佐伯と国木田独歩 (三)

「鹿狩」より

会員 山 本 深

「鹿狩」は、明治三十一年八月、独歩が家庭雜誌に発表した作品です。(当時二十八才)

明治二十六年十二月二、三日に分けて、鶴見半島(佐伯町)——葛港——猿戸——浦代——木立——佐伯——鹿狩をした時の振子が描かれています。

その作品の一部を左に抜粋いたします。(田が女(つかいばよる))

玄關の六疊の間(佐伯市馬場中根林蔵宅)に燈火が一つ釣してあって、火桶が三つ四つ出してある。其間、二人三人づつ穿つていて、笑ふやら罵るやら煙草の煙が口づつと立てこめている。

一同の様子を見ると尋常でない。各々粗末な面も丈夫そなな洋服を着て、鉄砲を各手に持って、色んな帽子を冠つて——どうしても山賊が一揆の夜討しか見えなかつた。

分の字港(葛港)に着くと、船頭が最常用意をして待っていた。寂寥い小な港の小な波止場の内から船を出すと直ぐ帆を張つた。風の具合が宜いので、船は少し左舷に傾きながら心持よく馳つた。

冬の寒い夜の暗い晩で、大空の星の数も読まらるばかりに舞かに、船で水と切つて行く先は波暗く萬悪く、僕はこゝろ晩のことを忘れることが出来な。

船のなかで酒が初まつた。そして談話は同じく猿の事、自分ら面白く思つて聞いて居たが、何時にか寂つて了つた。それは穂やが交罪のない賦りで、夢とも現ともなく、船を叩く水の音の、その柔かな秘話くやうな節々は口口口口と笑ふやうなまを直ぐ耳の下に一枚一枚を隔てて聞く其の心地よさ。時々眼を開けて見ると、薄暗い船灯の籠るお光の下に四座を組んで叔父さん達は愉快にやう御座る。

船がだんだん磯に近づくと、陸上の様子も少しは知れて来た。此処は兼取で聞いていたさの字浦(猿戸)で、つゝ字疋(鶴見崎)の片隅であつた。小な棧橋、棧橋とは言えないのが磯に出来ている。船をそれに着けて、吾等皆上陸した。

たつた一軒の漁師の家がある。しかし一軒が普通の漁師の立寄る家でも、吾等一組が山賊風でどさどさ入つていくと、兼取で通知してあつたことと見え六十ばかりのこの家の主人らしい老人が挨拶に出た。

船は陸とも島とも分らない山の根近く来て、帆を下ろしてゐた。陸の方では燈火一つ見えなくて、磯と左に波の音がするばかり、暗く寂しい。そして寒気は刺すやうで、山の端の月の光が氷つてゐるやうである。僕は何とも言へなく物凄さを感じた。

僕が戸外へ飛び出した。夜見たより一段、蕭条たる海地であつた。家の周囲は竊か軒の高さ程に一面に乾してある。山の窪などには煙が作つてあつて、其外は草ばかりで唯だ延々に松が一本二本直立つてゐる。僕はこんな延に鹿があるたうかと思つた。大空へ色と残月の光とで今日の天気がわかる。風が

清いこと、寒いこと月の光の遠いこと空の色の高いこと！ 僕は必然今日を鹿が獲れると思つた。

狐先きおかりハ小径を斜に山の底を横きつて登ると登りつめた処がハの字崎（鶴見崎）ハ背の一部にわたつて左右（佐相湾と米水津湾）ハ海である。それより此小径が二つに分れて一は崎ハ背を通して、其極端に至り、一は山の彼方に下りてハの字浦（中越）に出る。此三ヶ路ハ集つた処に一本の松が立つてゐる。一同は此松の下に休息して、ハの字浦（中越）ハ方から来る筈になつてゐる獵師の一組を待ち合はせてゐた。朝日が日向灘（太平洋）から昇つて、ハの字崎（鶴見崎）の半面は紅霞にまつまされた。茫茫たる海ハ極は遠く太平洋ハ水と連りて水乎線上ハ雲一ツ見えない。また四圍地が波の上ハ鮮かに見える。総ての眺望が高遠、壯大で、且つ優美である。

さて弁当を喰ひ了つて、叔父さんへ大將護佑、佐伯（士族）はそこでころりと横になつた。この時又恰度午後一時ごろで、冬空から南方温暖の地方ゆえ、小春日和の日中のように、うらうらと照る日影は人の心も靴も融けそうに生きた左かい。山にも桂草まじりの青葉少々からず日の光に映して、そよ吹く風にきらめき、海の波穏やかな色は、雲なき大空の色と相映して蒼蒼茫茫、東は際限なく水天互に交わり、北は四國の山山手に取るが如く、更に日向地（日向の國）（宮崎県）は右に伸びて、その南端は微蕨煙浪のうちに抹し去る。僕は少年心に、この美しい景色を眺めて、恍惚としていた。

（ここで少年が突然現れた大鹿と、叔父さんの發砲で打ちとめる、鹿狩のクライマックスが行なわれる。）

この日は獵師（中越）が言つた程の大鹿で日女か一た。しかし六頭の鹿と得て、先十大鹿の方であつた。そして僕（う）つた鹿が一番大きかつた。今井ハ叔父さんは帰り道、僕を傍から離さないで、無暗に僕ハ冒險を襲めた。帰路は二組に分れ、一組は船で帰り、一組は陸を徒歩で帰ることにして、僕は叔父さんが離さないで陸を帰つた。

陸の組は叔父さんと僕の外、判事さん（水野辰介）など五人であつた。ハの字崎（浦代崎）の坂道を走ると、判事さんが女よつと立ち止つて、溪流の岩の上に止つて、左小さい真黒な馬を打つた。

① 佐伯の狩獵グループの人々から、独歩が替わつて行つた鹿狩の経験と素直にしています。

同行者は独歩兄弟のほかには中根祿胤、大將護佑、水野辰介、玉置本資、遠城寺邦秀、齊藤才佐、長溝亨、何南勇など旧佐伯藩の士族の方々であつた。

齊藤才佐、中根祿胤、長溝亨、遠城寺邦秀は明治十一年八月、臼坪陸軍墓地（西南戦争戦死者）に一村の石燈籠を奉獻している気骨ある元佐伯藩士です。彼等は佐伯では上流階級の人たちでした。

② 先日、知人の自家用車に便乗して、鶴見町中浦小中学校を訪ねました。道路の立派さに驚きました。中浦の小中学校の鉄筋校舎、モダンな育明小学校の近代校舎と眺めて、隔世の感を抱きました。佐伯より羽出までは、よいドライブコースだなあと思ひました。

また十数年前、猿戸まで舟で行き、そこから徒歩で間越海岸（美南小学校）に出て、砂浜を散歩し、吉井松

白砂のすばらしい景色をたつたことを想起しました。ともかく、明治中期の鶴見半島の模様を「虎狩」の作品から充分読み取っていたとたいと思えます。現在、日野浦（有明小学校のある部）まで、大分バスも運行して交通も便利も随分よくなりました。一度は赴いて、見学するだけの価値もあるリアス式海岸です。

③ 鶴見岬観光案内

○ 鶴見半島

豊後水道でも、土つともリアス式海岸の曲折の美しさ、岬角、洞門の奇抜さ、岩礁群の複雑さなどの特徴を土つたところとす。海岸には海亀、ハマユウが、陸には猪除けのシシヤギなどが見られます。

○ 鶴見岬と元間海峡

鶴見岬の岬端は百米位の断崖になったところがあり、汐ふきとよばれる自然現象等もみられます。元間海峡は、汐の流れが速く、豊後鳴門とよばれるうず潮があり、また長年にわたる風波の侵食作用による数多くの洞窟などが特異な景をなしています。

○ 大島は岬から一軒の土つに浮かぶ周囲四軒の小島で釣りの名所。

水の子灯台は豊後水道に浮かぶ一等灯台で、見学者も多い。

中越浦のキリシタン墓、阿弥陀庵の桜、吉祥寺のつじなど、及ぶべきものが多い。その他、真珠ハマ子養殖、ミカン、海水浴場、宇戸島、熱地、元丹賀要塞なども観光の対象に挙げられます。

○ 水の子燈台は明治三十四年起工、三十七年三月竣工の難工事でした。高さ十八丈（約五十五米）、六万八千八百燭光、毎三十秒毎に一閃白光、海上七里火光信号で連絡、本邦一の一等燈台、工費二十万圓、関係職員は官舎は下梶寄にあり、週交代に交わっていました。海上が荒れると交替船は寄りつけず、当番は何日も雑詰同様に居残る外はつかつたといわれています。

昭和二十六年十一月八日、太陽熱による発電自然点火の光が強て百二十万カンデラといわれる日本最初の無人燈台となり、人力による手数が省かれるようになりました。

史談会顧問平田幸市先生の回想文の一節と左に掲げます。

鶴見半島縦走

忘れもせぬ終戦八年（昭和二十年）の八月二日午後、私（平田幸市）は、当時勤務中の水枝会社の使命をむかひて、数日前、社内の軍需供給関係の重要ポストの一員が鶴見岬の砲台整備工員として徴用されて行ったのさ連れ戻し、工作交換のため、会社を代表して出かけることになった。

当日は、朝から空模様は頗る陰悪、勿論佐伯から水立、浦代峠を徒歩、米水津村の小浦にいったのが既に深夜、知人宅に夜明けをまつて、翌朝早く出かけた。水踏の山路、犬が一筋道と聞いていたので、夜来の暴風猛雨とついて突進、漸くにして鹿垣のついでに鹿根に達した。鹿根道は高く低く東方海中の巨なた、雨脚の中にたづまいてゐる。背丈以上は生いっかぶさつたこの

一筋道は行文ふ人は一人もない。

時々ま、裁中から、哨戒が監視の兵が誰何する。

幸い要塞主砲の将官宛へ書類を懐中していたので、無事進むことができたが、洋上から吹きまくつて米の庭風、足元から巻き上げて来る大雨には開口、心細いこと限りなし。

連日空襲警報におびえ暮らしている身ながら、今日この時はかりは、全身まぶぬれ、吹き倒されぬために木の枝にしがみつくと、勿論遠望は利かぬ天候ではあるが、予静な日だったなら、さぞ素晴らしい景観だろうなと足と止めたい地点も見受けられたが、そんな気持のかとりはない。死物狂いである。

「今日（八月三日）は、自分の五十才の誕生日」。それと考えると元気が出た。行けども進めども鶴見崎は遠い。戦場ではないかと思われるような現場にたどりついたのは正午前であつた。

来意をつけると、この荒天の中、好意を以て遇され左のほよいが、本部の所在地根寄でないかと解決せぬという。本部では、係主任者が岬角（みささき）の砲台で作業の指揮をしているので、と又、下つたり上つたり。

却令よく会社へ申し出た了解されて、即時本人は微用解除が申し渡され、再度根寄の廠舎に下つて私物をまとめ、その工員と共に退去。今朝米左辰根づたいに引き返した。空は幾分予静を取り戻しつつあつたが、それでも相変わらず難行、油断ならぬ一足一足で、夕暮の小浦に戻りついた。

聞けば、今日も敵機は北進、警報が出たという。でも一人で出かけたのだが、帰りは二人、そのまゝ夜を徹して往路還行、深夜に及んで我が家に帰つたのである。雨と汗にまぶぬれの膚と着衣は、二、三日乾かな

つた気がする。実に生涯の難行、忘れぬ思い出でである。

海上から仰ぐ鶴見崎は、それまでに幾度か蒲江への船の往復で経験している。鶴見崎の全貌をこの足で踏破した日は、荒天の此の日限りである。

二十年後、今日これを書いた日、佐伯における国木田独歩と徳心たりする友に、今一度、この半島に行つて見たい希望を抱いている。今春、蒲江の波当津から日置町境の山々を越えて、鹿高知の峯に立つて日向離の大観を恣にして以来、この欲望は一層つらつて居るのだが、中々その機会はつかめそうでもない。

近頃鶴見半島のそこそこには、切支丹遺跡が知られぬが埋もれているとも聞く。その実地調査にでも出かけるようになったらと、厚のかが望みをもっているに過ぎない。

(注) 昭和四十四年六月一日、佐伯史談会日水の子燈台、鶴見半島楽場部、森村（広浦大島根寄、丹後）の古蹟をたずねました。

あ　と　か　き

○ 開越海岸

米水津村観光場所
五百米の海岸は白砂青松で、さきみだれるハマユウが群生した亜熱帯植物の景観はすばらしい。

さらに砂丘によつて出来た潟湖、豊富な魚貝、釣り、またキャンプなど別天地と思おせませす。宿泊にはへき地集會場が利用できます。

○ 元越山

標高五八一m。豊後水道の展望台として、国木田独歩がこよなく愛したところ。

麓ハ浦代峠は標の名所として知られていす。

○ 沖黒島

浦代からニ科ある無人島で全島原始林におおわれ、
タブ、シイ、アオキ、ヤブデ、ツバキなどがジャン
ガルとつくり、頂上附近にビロウ樹が自生していま
す。

○ 伝説の「粟島樺」、砂浜に清水湧く「丸井戸」、魚供
養の「魚鱗塔」などもあります。

佐伯市、鶴見町、米水津村の三者一体による「鶴見ス
カイライン」プロジェクトが、話題になり取りつてあります。

(参考資料)

年表

年号	記事
明治二十六年	国木田独歩元越山に登る(十一月五日、三十三歳)
〃	独歩鶴見半島遊覧(十二月二、三日)
〃 二十七年	独歩元越山に又登る(四月二十二日、三十四歳)
〃 二十八年	独歩小説「旅券」發表(二十八歳)
〃 三十四年	水の子燈台起工
〃 三十七年	竣工(工費二〇万円)
昭和十一年	平田幸市氏鶴見半島縦走(とのお)
〃 二十六年	水の子燈台、無人燈台となる。
〃 四十四年	佐伯史談会員、鶴見半島史跡巡り
〃 四十五年	佐伯市、南海部郡地域開発促進協議会、 会長、高山善吉佐伯商工会議所会頭、鶴 見スカイラインについて話し合い。

(つづく)

見学記

大野川流域の
石造文化財を視るの記

佐伯市文化財調査委員
佐伯史談会会員 伊賀重雄

小雨降る三月十五日、私達文化財調査委員一行は、竹
田市玉来の扇森翁神社の参詣と、大野川流域の石造文
化財に出かけることになった。
午前八時弥生所を出発、途中先ず大野郡千歳村長迫所
在の石塔群を見学した。この石塔群は部落の東のほうに
国道二〇五号線が古い古手の丘陵上におり、交通の便によ
い処にある。
石段を上ると正面に胎藏界の大日如来の坐像が、岩肌
さくつて出来た龕(ガン)の中の岩壁に彫彫で陽刻され、
その上を粘土細工で作像している。粘土細工の作像は短
めて見た。坐像で高さ四米もあつた程の大きなもので、作
像年月は定かではないが、室町時代中期のものと思われる。
礼る。

この坐像の両側に五輪塔四基と、空蓋印塔一基がある
が、いずれも鉄槌の女い完全な形で遺され、特に空蓋印
塔は小型で目立つが、姿が秀逸である。いずれも空野の
中期から後期に分けての造塔と想像されるが惜しいこと
にこれと証する銘文がなく、はつきりした製作年代はつ
まびらかでない。

雨の中を長迫の石塔群に別れを告げ、午前十時半扇森
翁(俗に言ふ狐頭さま)に参詣して、今年的一家安全と
祈り、十二時すぎ朝地所の普光寺登崖仏を見る。住職の